

興來大

野

野

野

野

也

續

為

其

獨

野

國

師

子

女

海

楚

世

乙

子

于

止

自

漱石全集
第十一卷

行人

漱石全集月報 昭和三年版
昭和十年版

菊判 一四〇〇円

漱石の芸術 小宮豊隆著

B6判 二八〇〇円

座談会 明治文学史 柳田泉・勝本清一郎・猪野謙二編

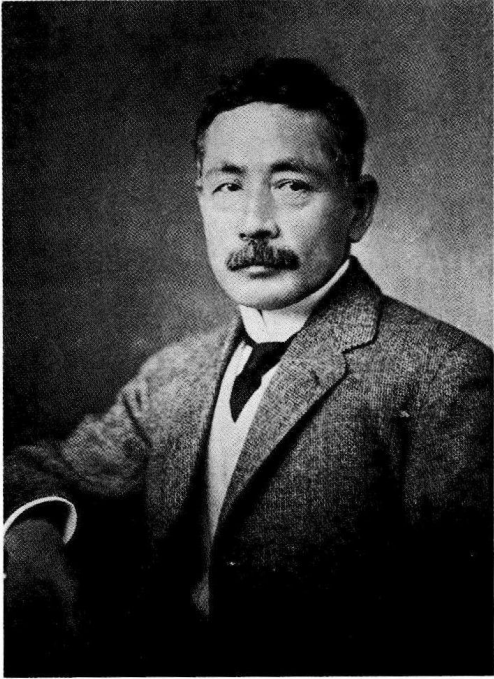
B6判 二〇〇〇円

寺田寅彦全集(全一七卷)

新書判 各八〇〇円

鷗外選集(全一二卷) 既刊第一―六卷

新書判 各九八〇円



大正元年十月撮影

目次

行人

友達

兄

歸つてから

塵勞

解説

注解

五

六七

一五五

二三四

三三七

三四九

行人

大正元、二二、六一二、一一、一五

友 達

一

梅田＊うめだの停車場ステーションを下りるや否や自分は母から云ひ付けられた通り、すぐ俵くくるまを雇やとつて岡田おかだの家に馳かけさせた。岡田は母方の遠縁に當る男であつた。自分は彼が果はたして母の何に當るかを知らずに唯疎うとい親類とばかり覺えてゐた。

大阪へ下りるとすぐ彼を訪うたのには理由があつた。自分は此處へ來る一週間前＊まへ或友達と約束をして、今から十日以内に阪地はんちで落ち合はう、さうして一所に高野かうや登りを遣らう、若し時日じじつが許すなら、伊勢から名古屋へ廻まはらう、と取り極めた時、何方どっちも指定すべき場所を

有たないので、自分はいつ岡田の氏名と住所を自分の友達に告げたのである。

「どうや大阪へ着き次第、其處へ電話を掛ければ君の居るか居ないかは、すぐ分るんだね」と友達は別れるとき念を押した。岡田が電話を有つてゐるかどうか、其處は自分にも甚だ危あやしかつたので、もし電話がなかつたら、電信でも郵便でも好いから、すぐ出して呉れるやうに頼んで置いた。友達は甲州線＊かうしゅうせんで諏訪すわまで行つて、夫それから引返して木曾を通つた後、大阪へ出る計畫であつた。自分は東海道を一息ひといきに京都迄來て、其處で四五日用足ようたく旁たぐ逗留してから、同じ大阪の地を踏む考へであつた。

豫定の時日を京都で費つひやした自分は、友達たよりの消息を一一刻も早く耳にする爲め停車場を出ると共に、岡田の家を尋ねなければならなかつたのである。けれども夫それはたゞ自分の便宜になる丈だけの、いはゞ私の都合に過ぎな

いので、先刻云つた母の云付とは丸で別物であつた。母が自分に向つて、彼方へ行つたら何より先に岡田を尋ねるやうにと、わざ／＼荷になる程大きい鎌入の菓子、御土産だよと斷つて、鞆の中へ入れて呉れたのは、昔氣質の律儀からではあるが、其奥にもう一つ實際的の用件を控へてゐるからであつた。

自分は母と岡田が彼等の系統上どんな幹の先へ岐れて出た、どんな枝となつて、互に關係してゐるか知らない位な人間である。母から依託された用向についても大した期待も興味もなかつた。けれども久し振に岡田といふ人物——落ち付いて四角な顔をしてゐる、いくら鬚を欲しがつても鬚の容易に生えない、しかも頭の方がそろ／＼薄くなつて來さうな、——岡田といふ人物に會ふ方の好奇心は多少動いた。岡田は今迄に所用で時々出京した。所が自分は何時も懸け違つて會ふ事が出来なかつた。従つて強く酒精に染められた彼

の四角な顔も見る機會を奪はれてゐた。自分は俵の上で指を折つて勘定して見た。岡田が居なくなつたのは、つい此間の様でも、もう五六年になる。彼の氣にしてゐる頭も、此頃では大分危険に逼つてゐるだらうと思つて、その地の透いて見える所を想像したり忖した。

岡田の髪の毛は想像した通り薄くなつて居たが、住居は思つたよりも薩張した新しい普請であつた。

「どうも上方流で餘計な所に高塀なんか築き上げて、陰氣で困つちまいます。其代り二階はあります。一寸上つて御覽なさい」と彼は云つた。自分は何より先に友達の事が氣になるので、斯う／＼いふ人からまだ何とも通知は來ないかと聞いた。岡田は不思議さうな顔をして、いゝえと答へた。

二

自分は岡田に連れられて二階へ上つて見た。當人が

自慢する程あつて眺望は可なり好かつたが、縁側のな
い座敷の窓へ日が遠慮なく照り返すので、暑さは一通
りではなかつた。床の間に懸けてある軸物も反つくり
返つて居た。

「なに日が射す爲ぢやない。年が年中懸け通しだか
ら、糊の具合であゝなるんです」と岡田は眞面目に辯
解した。

「成程梅に驚だ」と自分も云ひたくなつた。彼は世
帯を持つ時の用意に、此幅を自分の父から貰つて、大
得意で自分の室へ持つて来て見せたのである。其時自
分は「岡田君此呉春は偽物だよ。夫だからあの親父が
君に呉れたんだ」と云つて調戲半分岡田を怒らした事
を覚えてゐた。

二人は懸物を見て、當時を思ひ出しながら子供らし
く笑つた。岡田は何時迄も窓に腰を掛けて話を續ける
風に見えた。自分も襦袢に洋袴丈になつて其處に寐轉

びながら相手になつた。さうして彼から天下茶屋の形
勢だの、將來の發展だの、電車の便利だのを聞かされ
た。自分は自分に夫程興味のない問題を、たゞ素直に
はい／＼と聽いて居たが、電車の通じる所へわざ／＼
俾へ乗つて來た事丈は、馬鹿らしいと思つた。二人は
又二階を下りた。

やがて細君が歸つて來た。細君はお兼さんと云つて、
器量は夫程でもないが、色の白い、皮膚の滑らかな、
遠見の大變好い女であつた。父が勤めてゐたある官省
の屬官の娘で、其頃は時々勝手口から頼まれものゝ仕
立物などを持つて出入をしてゐた。岡田は又其時自分
分の家の食客をして、勝手口に近い書生部屋で、勉強
もし晝寐もし、時には焼芋杯も食つた。彼等は斯様に
して互に顔を知り合つたのである。が、顔を知り合つ
てから、結婚が成立するまでに、どんな徑路を通つて
來たか自分はよく知らない。岡田は母の遠縁に當る男

だけれども、自分の宅では書生同様にしてゐたから、下女達は自分や自分の兄には遠慮して云ひ兼ねる事迄も、岡田に對してはつけく〜と云つて退けた。「岡田さんお兼さんが宜しく」杯といふ言葉は、自分も時々耳にした。けれども岡田は一向氣にも留めない様子だつたから、大方たゞの徒事だらうと思つてゐた。すると岡田は高商を卒業して一人で大阪のある保險會社へ行つて仕舞つた。地位は自分の父が周旋したのでさうである。夫から一年程して彼は又飄然として上京した。さうして今度はお兼さんの手を引いて大阪へ下つて行つた。これも自分の父と母が口を利いて、話を纏めて遣つたのださうである。自分は其時富士へ登つて甲州路を歩く考へで家には居なかつたが、後で其話を聞いて一寸驚いた。勘定して見ると、自分が御殿場で下りた汽車と擦れ違つて、岡田は新しい細君を迎へるために入京したのである。

お兼さんは格子の前で疊んだ洋傘を、小さい包と一緒に、脇の下に抱へながら玄關から勝手の方に通り抜ける時、ちよつと極の悪さうな顔をした。其顔は日盛の中を歩いた火氣のため、汗を帯びて赤くなつてゐた。「おい御客さまだよ」と岡田が遠慮のない大きな聲を出した時、お兼さんは「只今」と奥の方で優しく答へた。自分は此聲の持主に、かつて着た久留米紬やフラン子の襦袢を縫つて貰つた事もあるのだなと不圖懐かしい記憶を喚起した。

三

お兼さんの態度は明瞭で落付いて、何處にも下卑た家庭に育つたといふ面影は見えなかつた。「二三日前からもう御出だらうと思つて、心待に御待申して居りました」など、云つて、眼の縁に愛嬌を漂よはせる所などは、自分の妹よりも品の良い許でなく、様子も幾

分か立優つて見えた。自分はしばらくお兼さんと話してゐるうちに、是なら岡田がわざ／＼東京迄出て来て連れて行つても然るべきだといふ氣になつた。

此若い細君がまだ娘盛の五六年前に、自分は既に其聲も眼鼻立も知つてゐたのではあるが、夫程親しく言葉を換はず機會もなかつたので、斯うして岡田夫人として改まつて會つて見ると、さう馴々しい應對も出来なかつた。それで自分は自分と同階級に屬する未知の女に對する如く、畏まつた言語をぽつ／＼使つた。岡田はそれが可笑しいのか、又は嬉しいのか、時々自分の顔を見て笑つた。夫丈なら構はないが、折節はお兼さんの顔を見て笑つた。けれどもお兼さんは澄ましてゐた。お兼さんが一寸用があつて奥へ立つた時、岡田はわざと低い聲をして、自分の膝を突つつきながら、「何故あいつに對して、さう改まつてるんです。元から知つてる間柄ぢやありませんか」と冷笑すやうな句

調で云つた。

「好い奥さんになつたね。あれなら僕が貰やよかつた」

「冗談いつちや不可ない」と云つて岡田は一層大きな聲を出して笑つた。やがて少し眞面目になつて、「だつて貴方はあいつの悪口をお母さんに云つたつていふぢやありませんか」と聞いた。

「何んで」

「岡田も氣の毒だ、あんなものを大阪下り迄引つ張つて行くなんて。最う少し待つてゐれば己が相當なのを見付けてやるのにつて」

「そりや君昔の事ですよ」

斯うは答へたやうなものゝ、自分は少し恐縮した。且一寸狼狽した。さうして先刻岡田が變な眼遣をして、時々細君の方を見た意味を漸く理解した。

「あの時は僕も母から大變叱られてね。御前のやう

な書生に何が解るものか。岡田さんの事はお父さんと私とで當人達に都合の好いやうにしたんだから、餘計な口を利かずに黙つて見て御出なさいつて。どうも手痛くやられました」

自分は母から叱られたといふ事實が、自分の辯解にもなるやうな語氣で、其時の様子を多少誇張して述べた。岡田は益々笑つた。

夫でもお兼さんが又座敷へ顔を出した時、自分は多少極りの悪い思をしなければならなかつた。人の悪い岡田はわざ／＼細君に、「今二郎さんが御前の事を大變賞めて下さつたぜ。よく御禮を申し上げるが好い」と云つた。お兼さんは「貴方があんまり悪口を仰しやるからでせう」と夫に答へて、眼では自分の方を見て微笑した。

夕飯前に浴衣がけで、岡田と二人岡の上を散歩した。まばらに建てられた家屋や、それを取り巻く垣根が東

京の山の手を通り越した郊外を思ひ出させた。自分は突然大阪で會合しやうと約束した友達の消息が氣になり出した。自分はいきなり岡田に向つて、「君の所にや電話はないんでせうね」と聞いた。「あの構で電話があるやうに見えますかね」と答へた岡田の顔には、たゞ機嫌の好い浮き／＼した調子ばかり見えた。

四

それは夕方の比較的長く續く夏の日の事であつた。二人の歩いてゐる岡の上は殊更明るく見えた。けれど、遠くにある立樹の色が空に包まれて段々黒ずんで行くにつれて、空の色も時を移さず變つて行つた。自分は名残の光で岡田の顔を見た。

「君東京に居た時より餘程快活になつた様ですね。血色も大變好い。結構だ」

岡田は「えゝまあお蔭さまで」と云つたやう曖昧な

挨拶をしたが、其挨拶のうちには一種嬉しさうな調子もあつた。

もう晩飯の用意も出来たから歸らうぢやないかと云つて、二人歸路についた時、自分は突然岡田に、「君とお兼さんとは大變仲が好いやうですね」といつた。自分は眞面目な積だつたけれども、岡田にはそれが冷笑のやうに聞えたと見えて、彼はたゞ笑ふ丈で何の答へもしなかつた。けれども別に否みもしなかつた。

少時してから彼は今迄の快豁な調子を急に失つた。

さうして何か秘密でも打ち明けるやうな具合に聲を落した。それでゐて、恰も獨言をいふ時のやうに足元を見詰ながら、「是であいつと一所になつてから、彼是もう五六年近くになるんだが、どうも子供が出来ないんでね、何ういふものか。それが氣掛で……」と云つた。

自分は何とも答へなかつた。自分は子供を生ます爲

に女房を貰ふ人は、天下に一人もある筈がないと、豫てから思つてゐた。然し女房を貰つてから後で、子供が欲しくなるものかどうか、其處になると自分にも判断が付かなかつた。

「結婚すると子供が欲しくなるものですかね」と聞いて見た。

「なに子供が可愛いかどうかまだ僕にも分りませんが、何しろ妻たるものが子供を生まなくつちや、丸で一人前の資格がない様な氣がして……」

岡田は單にわが女房を世間並にする爲に子供を欲するのであつた。結婚はしたいが子供が出来るのが怖いから、まあ最う少し先へ延さうといふ苦しい世の中で、すよと自分は彼に云つて遣りたかつた。すると岡田が「それに二人切ぢや淋しくつてね」と又つけ加へた。

「二人切だから仲が好いでせう」

「子供が出来ると夫婦の愛は減るもんでせうか」

岡田と自分は實際二人の経験以外にあることを左も心得た様に話し合つた。

宅では食卓の上に刺身だの吸物だのが綺麗に並んで二人を待つてゐた。お兼さんは薄化粧をして二人のお酌をした。時々は團扇を持つて自分を扇いで呉れた。自分は其風が横顔に當るたびに、お兼さんの白粉の匂を微かに感じた。さうして夫が麥酒や山葵の香よりも人間らしい好い匂の様に思はれた。

「岡田君は何時も斯うやつて晩酌を遣るんですか」と自分はお兼さんに聞いた。お兼さんは微笑しながら、「どうも後引上戸で困ります」と答へてわざと夫の方を見遣つた。夫は、「なに後が引ける程飲ませやしないやね」と云つて、傍にある團扇を取つて、急に胸のあたりをはたくいはせた。自分は又急に此地で會ふべき筈の友達の事に思ひ及んだ。

「奥さん、三澤といふ男から僕に宛てて、郵便か電報

か何か來ませんでしたか。今散歩に出た後で」

「來やしないよ。大丈夫だよ、君。僕の妻はさう云ふ事はちやんと心得てるんだから。ねえお兼。——好いぢやありませんか、三澤の一人や二人來たつて來なかつて。二郎さん、そんなに僕の宅が氣に入らないんですか。第一貴方はあの一件からして片付けて仕舞はなかつちやならない義務があるでせう」

岡田は斯う云つて、自分の洋盃へ麥酒をゴボくと注いだ。もう餘程酔つてゐた。

五

其晩はどうく岡田の家へ泊つた。六疊の二階で一人寐かされた自分は、蚊帳の中の暑苦しさに堪へかねて、成るべく夫婦に知れないやうに、そつと雨戸を開け放つた。窓際を枕に寐てゐたので、空は蚊帳越にも見えた。試に赤い裾から、頭だけ出して眺めると星が

きら／＼と光つた。自分はこんな事をする間にも、下にゐる岡田夫婦の今昔は忘れなかつた。結婚してからあゝ親しく出来たら嘸幸福だらうと羨ましい氣もした。三澤から何の音信のないのも氣掛りであつた。然し斯うして幸福な家庭の客となつて、彼の消息を待つために四五日愚圖々々してゐるのも悪くはないと考へた。一番何うでも好かつたのは岡田の所謂「例の一件」であつた。

翌日眼が覺めると、窓の下の狭苦しい庭で、岡田の聲がした。

「おいお兼と／＼絞りのが咲き出したぜ。一寸來て御覽」

自分は時計を見て、腹這になつた。さうして燐寸を擦つて敷島へ火を點けながら、暗にお兼さんの返事を待ち構へた。けれどもお兼さんの聲は丸で聞えなかつた。岡田は「おい」「おいお兼」を又二三度繰返した。

やがて、「せわしない方ね、貴方は。今朝顔どころぢやないわ、臺所が忙しくつて」といふ言葉が手に取るやうに聞こえた。お兼さんは勝手から出て來て座敷の縁側に立つてゐるらしい。

「それでも綺麗ね。咲いて見ると。——金魚はどうして」

「金魚は泳いでゐるがね。どうも此方は六づかしいらしい」

自分はお兼さんが、死にかゝつた金魚の運命について、何かセンチメンタルな事でもいふかと思つて、煙草を吹かしながら聽いてゐた。けれどもいくら待つてゐても、お兼さんは何とも云はなかつた。岡田の聲も聞こえなかつた。自分は煙草を捨て、立ち上つた。さうして可成急な階子段を一段づゝ音を立て、下へ降りて行つた。

三人で飯を済ました後、岡田は會社へ出勤しなければ